

<「知るっば!久留米」 令和2年4月30日(木) 12:30~放送分>

ドイツさんと久留米 ～第5回～ ドイツさんとゴム産業

<ゲスト： 市文化財保護課 主査 小澤太郎さん>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば!久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。4月は「ドイツさんと久留米」をテーマにお送りしてきました。

いよいよシリーズのラストです。今回も久留米市文化財保護課の小澤さんにお伺いします。

小澤さん、よろしくお願いします。

今回のテーマは、『ドイツさんとゴム産業』ということで、ドイツさんというのは先進工業国の人々なので、そういう進んだ技術を持って久留米に来られたのかなと思います。

では、ドイツさんが久留米に持ってきた、進んだ工業技術やものづくりの力は、どんなものがありましたか？

ゲスト:小澤さん (以下「小澤」)

ドイツ人捕虜には色々な技術者がいたんですよ。工業だけでなく、食品関係の技術者もいたんです。そして、久留米の捕虜の中には、解放された後も日本に残って様々な産業で活躍した人々があります。その中に食品産業で活躍したドイツさんがいるんですけど、彼が作ったのが皆さんにも馴染み深いハムです。中でも目玉焼きと一緒によく食べるロースハムなんですけど、実はロースハムってドイツにはなかったんですよ。そのロースハムを作ったのが久留米の捕虜、ドイツさんなんです。彼は収容所から解放された後、東京で修行し、後に独立してロースハムを作るんです。

坂本 じゃあ、ロースハムというのは、本場ドイツ生まれではなく、日本生まれだったということですか？

小澤 はい。そのドイツさんは、久留米収容所にいるときに厨房係だったのですが、その時にアイデアが浮かんだそうです。そして、収容所で日本語を勉強して日本で起業することを選んだんです。

坂本 そのドイツさんは、収容所から解放されても母国には帰らず、日本で暮らすことを選んだんですね。そんなに日本が気に入ってたんですか？

小澤 そうなんですよね。久留米で捕虜として収容されていながら、久留米の人々が受け入れてくれたことで、解放後も日本で生活していこうという気持ちになったんでしょうね。

坂本 捕虜であるドイツさんに対して、そういう対応をしてきた久留米の人々も立派じゃないですか？

小澤 ええ、そのドイツさんが久留米に来ていなければ、美味しいロースハムは生まれなかったかもしれないですね。
ここからが本題ですが、ドイツさんが久留米に直接的に大きな影響を与えたのが、やはりゴム産業です。

坂本 久留米といえば、やはりゴム産業ですよ。では、ドイツさんとゴム産業のお話をお願いします。

小澤 ドイツ人捕虜は色々な技術を持っていたので、日本政府もその技術を教えてもらい、日本も近代的な国になりたかったわけです。
久留米の場合、民間会社が地下足袋を作っていたんですが、足袋の底にゴムを着けようというアイデアがでて、それでドイツ人捕虜のゴム技術者を雇うことになったんです。
そのドイツさんは、収容所から地下足袋の会社に通勤していたみたいです。

坂本 それは、収容所から路面電車とかを使って工場まで通勤していたということですか？

小澤 そうです。地下足袋にゴム底を圧着する機械を作ったりしていたようです。

坂本 ゴムとそのキャンバス地をいかに接着させるかが、当時は難しい技術だったんですね？

小澤 はい。その結果、当時、ゴム底の地下足袋は大ヒットだったんですよ。

坂本 ドイツさんが、日本初のゴム底地下足袋開発に大きく貢献していたんですね？

小澤 そうなんです。ドイツさんは、その機械に関する色々な特許も取得しているんですよ。
大正の初め頃、そのドイツさん達の技術伝達もあって、久留米ではゴム関連の研究が進められ、地下足袋産業からゴム産業へと転換していったんです。

坂本 地下足袋からゴム産業なんですよ。そして、ゴム産業といえばタイヤですよ？

小澤 人間の足から車の足ですね。そこには、石橋正二郎という代表的な人物がいますからね。
彼は先見の明がありましたから、これからは自動車の時代だと。
ちょうどその頃、久留米でも自動車やバスが走り始めていましたから、そこに目を付けたんですよ。

坂本 そのタイヤにもドイツさんが関わっていたんですか？

小澤 そうなんです。ドイツさんの捕虜が解放されたのが昭和の初め頃なんです。昭和4年頃にタイヤの開発をする会社が久留米にできます。そこにいたドイツさんが、タイヤの調合などに関わっていて、非常に重要な役割を担っていたみたいです。

坂本 耐久性のあるタイヤの開発をしていたわけですね？

小澤 そうなんです。そして、その会社というのが、有名なブリヂストンなんです。
もともとの社名のアイデアは、石橋さんが創業した世界に通用する企業ということでストーンブリッヂだったらしいんです。
しかし、ドイツさんがブリヂストンの方がいいと進言してブリヂストンになったようです。

坂本 私たち日本人にはわからない横文字のリズムみたいなものがあったんでしょうね。

小澤 そのドイツさんの進言がなかったら、今我々が知っているブリヂストンのブランド名にはなっていなかったでしょう。

坂本 社名という非常に重要な事項で、ドイツさんの進言を受け入れた企業もすごいですよね？

小澤 そうですね。ゴムの調合の技術者というのは、ゴム企業の根幹を担っていたわけですから、ドイツさんは信用されていたし、非常に重要なポジションにいたということでしょうね。
同じようにドイツさんが、アサヒシューズ、ムーンスター、そしてブリヂストンの3社に携わってきたことで、久留米をゴム産業の街に引き上げてきたんです。

坂本 ものづくりの街として、久留米の経済発展の基になったのがゴム産業であり、そこにドイツさんが大きく関わっていたということですね。

小澤 歴史にもしもはないって言いますが、ドイツさんがいなかったら久留米はどうなっていたか。

坂本 ドイツさんは、経済面でも久留米を豊かにしてくれた一因だったということですね？

小澤 そうですね。初回の話でもありましたが、ドイツさんは国から給料もらえてたんですよ。
そして、売店でビールを買ったり、楽器も買って話があったように、ドイツさんの消費支出はすごいですよ。当時の久留米市の年間予算を超えるくらいのお金を毎年使っていたんです。

坂本 ビールだけでも久留米市年間予算の約1割でしたよね。

小澤 ドイツさんたちは、その他にも色々な分野でいっぱいお金を使っているんですね。
だから、久留米市の予算を超える額を久留米市に投資していたってことで、産業経済界が非常に潤ったんですよ。

坂本 久留米にとってドイツさんは、文化だけでなく、経済的にも非常に大きなインパクトがあったということですね。

小澤 当時の久留米は、ドイツさんの原資を使用して、色々なゴム製品を開発していったという構造だったと思うんですね。

坂本 すごいですね。久留米とドイツさんは、切っても切れないご縁があったんですね。

小澤 だからこそ、やっぱり久留米の市民は、ドイツ人捕虜を『ドイツさん』とさん付けて呼んでたんですよ。

坂本 久留米の人たちも捕虜であるドイツさんを受け入れて、娯楽や仕事などを一緒にしていった久留米の人々も、僕は立派だったなと思いますけどね。

小澤 そうですね。それ以外にもドイツさんは、写真もいっぱい残しているんですね。

坂本 ドイツさんは、写真の技術もあったんですね？

小澤 ドイツさんの写真はいい写真ばかりで、久留米市民と写ってる写真とか結構ありますね。久留米の子供達は、笑顔で目をキラキラさせていますよ。

坂本 当時、久留米では西洋式の写真を撮るっていうことは、まだあまりなかったんじゃないですか？

小澤 当時はまだプロの写真家とか、新聞社とか、絵葉書を作るための写真くらいで、一般家庭には全然普及していなかったんです。

坂本 私たちが生活のスナップとかをスマホで撮るみたいなことはなかったでしょうね。

小澤 当時の日本の写真は、記念写真ばかりでした。

それに対して、ドイツさんたちは、久留米市民の日常生活をたくさん撮って残してますね。

坂本 この写真を見ていると、いつまでも話したい気になりますが、5回にわたり『ドイツさんと久留米』についてお送りしてきました。

小澤さんにもお付き合いいただきまして本当に有難うございました。

シリーズは今日で終わりということになりました。

今日ご紹介した情報は、久留米市の公式ホームページ内の『ドイツさんと久留米』でもご覧いただけます。また、久留米市ではドイツさんの足跡が残るアサヒシューズ、ブリヂストン、ムーンスターのゴム3社と共同で功績を見学者の皆さんに発信しています。

次のテーマは、久留米市の地域おこし協力隊をお呼びして、まちおこしについてお話をさせていただきたいと思います。お楽しみに。